私の履歴書

前橋汀子 ⑪

ワイマン先生

人前で演奏 本番への訓練

学んだ奏法、今に生きる

サンクトペテルブルクはロシアの北西、バルト海に面した海港都市。帝政ロシア時代の首都で、エルミタージュ美術館をはじめ、ロシア文化の粋がここに集まっている。レニングラードと呼ばれたソ連時代は数十メートおきにレーニンの銅像が立っていた。

レニングラード音楽院はオペラとバレエの殿堂、キーロフ劇場（現マリインスキー劇場）の向かいにあった。サンクトペテルブルク音楽院と名を変えた今も同じ場所にある。学生寮からバスで40分かけてここに通うことになった。

ミハイル・ワイマン先生のレッスンは週3回、午後4時に始まって10時まで続いた。先生の25番教室は多くのバイオリンの巨匠を育てたレオポルト・アウアー教授にちなんで「アウアー教室」と呼ばれた。ワイマン先生はアウアーの孫弟子に当たる。

先生のクラスは男女合わせて14人。私と潮田益子さん以外にも女子学生が4人いた。どの学生も信じられないくらい上手に弾く。よくこのクラスに入れてもらえたものだ。

先生のレッスンはどの学生でも聴講できた。つまり私の練習を他の学生たちが聴きにくるのである。練習途中の演奏を人に聴かれるのは恥ずかしくて嫌だったが、それも先生の狙いだった。普段から人前で演奏することに慣れていれば、本番のステージで弾く度胸もつくというわけだ。

実際、先生は一般のお客さんの前で演奏する機会をどんどん与えてくださった。留学して間もない1961年秋、母に送った手紙が残っている。「ママ、こまっちゃった。載っているのを見つけて出演を知った。ワイマン先生が出演を決め、私に知らせるのを失念したままフィンランドへ旅行に出られたのだった。

「テイコ、伝統あるアウアー教室の奏法を学ばないか」。ある日、ワイマン先生がそう言った。焦点になったのは左手の指の押さえ方だ。それまで私は人さし指を起点に中指、薬指、小指の順に音程をとっていた。先生は逆に小指を起点にする奏法を勧めた。こうすれば手首の力が抜け、ごく自然に構えられる。

しかし、17歳まで体にしみ込ませてきた弾き方を根本から変えることになる。先生も強制はしなかった。私は迷った末に「やってみます」と答えた。当然、最初はうまく弾けなくなった。結局、この奏法を完全に体得するまでに10年ほどかかるのだが、あの時に体の負担の少ない奏法を選んだからこそ、今の年齢でも演奏できているのだと思う。

ジョイントリサイタルの前日、母の送った洋服が届いたと郵便局から連絡があった。「取りにいってきます」と先生に言うと「新しい服を着るのと、一つでも多くの正しいビブラートを勉強するのとどちらが必要だと思う」とおっしゃった。私は母への手紙に「本当に良い先生です。あらゆる点で驚き、尊敬しています」とうれしそうに書いている。

（バイオリニスト）

ワイマン先生と

掲載日 2018年10月12日 日本経済新聞 朝刊 36ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。